

## 小学生の防犯に関する市販書籍における 犯罪被害防止対策の内容に関する検討

刈間 理介<sup>1), 8)</sup>, 越智 啓太<sup>2), 8)</sup>, 村上 元良<sup>3), 8)</sup>, 西岡 伸紀<sup>4), 8)</sup>, 武藤 孝司<sup>5), 8)</sup>,  
衛藤 隆<sup>6), 8)</sup>, 藤田 大輔<sup>7), 8)</sup>

- 1) 東京大学 環境安全研究センター
- 2) 法政大学大学院 人文学研究科
- 3) 京都府綾部市立中筋小学校
- 4) 兵庫教育大学大学院 学校教育研究科
- 5) 獨協医科大学 医学部
- 6) 日本子ども家庭総合研究所
- 7) 大阪教育大学 学校危機メンタルサポートセンター
- 8) 科学技術振興機構 社会技術研究開発センター (RISTEX)

### The analysis of the measures for crime prevention proposed by the commercial books for the safeguard of elementary school students against crimes

#### 要約

世界保健機関 (WHO) はセーフコミュニティ活動 (SC活動) とセーフティプロモーション活動 (SP活動) において取り組むべき課題として「子どもの安全」および「暴力からの被害防止」を含めたいくつか複数の課題を提起している。その意味から、「子どもの犯罪被害防止」への取り組みは、SC活動とSP活動において活動課題の一つとして位置づけられるべきであると言える。本研究は、2000年から2009年に出版された小学生の防犯に関する市販書籍のうち一定の条件を満たした33の書籍に記載されている小学生の防犯に関する内容を全て抽出し、そこに小学生の防犯対策における一定のコンセンサスが見出し得るかを明らかにすることを目的としたものである。結果として、33書籍の全てに記載されていた事項は「危険を感じたら大声を出す」という1項目のみであり、また、33書籍のうち90%以上の書籍で記載されていた事項は6項目、80%以上の書籍で記載されていた事項も16項目に留まっており、結論として一般の市販書籍のレベルでは小学生の防犯対策に関するコンセンサスの形成は不十分であることが示された。一方で、記載のある書籍数が多かった上位63項目に含まれる事項はいずれも小学生の犯罪被害防止のために重要と考えられる事項であった。また、33書籍中の記載率は低かったが小学生の犯罪被害防止のために重要と思われる事項も多く認められた。今後、本研究の結果等を基に、小学生の防犯対策に関するコンセンサスの形成が促進されることが望まれる。

キーワード：小学生, 防犯, 犯罪被害防止, 防犯教育, 防犯関係書籍

#### Abstract

World Health Organization (WHO) has presented the issues for the measures of safe communities and the activities for safety promotion, including "safety of children" and "prevention of harms from violence". In this meaning, the measures for the safeguard of children from crimes should be situated as one of the important issues in the activity of safety promotion. So far, however, it has not been clarified what matters are generally proposed for the prevention of child's harms by crimes. The aim of this study is to examine the contents in 33 commercial books published during the last decade (from 2000 to 2009) in Japan concerning the measures for the safeguard of elementary school students against crimes. As a result, it turned out that only one item "Cry out with a large voice when you feel danger!" was commonly described in all the books. The items written in more than 90% of these 33 books remained only 6 matters, and only 16 matters were found in more than 80% of these books, indicating the lack of sufficient consensus concerning the matters which should be taught for elementary school students to prevent criminal victims. On the other hand, a variety of vital measures were found in the contents of these books, especially in the top 63 items with higher rate of description among the 33 books. Moreover, not a few items were recognized to be essential to keep elementary school students away from crime victims, while these items were not accompanied with high rate of description in these books. Through the examination of the contents of the 33 books for crime prevention, these findings indicate the necessity of the formation of the consensus in the safety education against crimes toward elementary school students. The findings of this study will contribute to the process of the generation of the consensus.

Key Words : elementary school student, crime prevention, prevention of crime victim, education for crime prevention, book for crime prevention

## 1. はじめに

世界保健機関（WHO）が示しているセーフコミュニティ活動（SC活動）とセーフティプロモーション活動（SP活動）において対象とすべき事項については、スウェーデンのカロリンスカ研究所のCommunity Safety Promotion WHO協働センターが提示したセーフコミュニティ認証基準の中で、代表的な対象例として「① 交通安全」、「② 家庭における安全」、「③ 職業に関わる安全」、「④ スポーツに関する安全」、「⑤ 学校における安全」、「⑥ 公共の場における安全」、「⑦ 子どもの安全」、「⑧ 高齢者の安全」、「⑨ 犯罪・暴力からの安全」および「⑩ 自殺の防止」の10事項が具体的に明記されている<sup>1)</sup>。セーフコミュニティ認証基準では、セーフコミュニティの認証を受けようとする自治体・地区の事情に応じて少なくとも6項目について対策グループを設けSP活動に取り組むことを求めている。ここで注目すべきは、上記10項目に「⑦子どもの安全」と「⑨犯罪・暴力からの安全」が記されている事である。この二つの事項から、「子どもの犯罪被害防止」はSC活動およびSP活動において取り組むべき課題の一つとして位置づけられると考える。

WHOが唱える「安全」の定義については、1998年にWHOがスウェーデンのカロリンスカ研究所およびカナダのケベックのCommunity Safety Promotion WHO協働センターと共同で発表した報告書「Safety and Safety Promotion: Conceptual and Operational Aspects」の中で、「安全とは個人や社会の健康と幸福を守るために身体的、心理的、物的な危険や損害をもたらす要因が制御（control）された状態であり、安全は個人や社会の目標を実現するために必要とされる日常生活において最も重要な源である」

と明記されている<sup>2)</sup>。SC活動およびSP活動は基本的に身体的な外傷防止に重点を置いたものではあるが、WHOの「安全」の定義に基づけば、SC活動およびSP活動では身体的な危険・損害の防止だけではなく、心理的・物的な危険・損害をもたらす要因の統制（control）も目指すべきであると解釈できる。子どもの犯罪被害は必ずしも身体の外傷をもたらさなくても、他人に対する恐怖心・不信感などの心理的被害をもたらすことが少なくない。その意味からも、「子どもの犯罪被害の防止」はSC活動およびSP活動において重要な課題の一つであると言える。

子どもを対象とした防犯教育の充実、子どもの犯罪被害防止のための重要な対策の一つである。しかしながら、子どもが犯罪被害に遭わないために、子どもにどのような知識や行動を教えればよいのかという課題につい

て、現段階で十分に共通認識が形成されているかどうかという点については不明である。2004年に警視庁少年育成と東京都教育庁指導企画課が考案した防犯標語「いかのおすし」<sup>3)</sup>は、現在、日本の子どもに対する防犯教育において広く普及した標語である。しかし、「いかのおすし」が示す「知らない人にはついていかない」、「他人の車に乗らない」、「何かあったら大きな声を出す」、「何かあったらすぐに逃げる」、「何かあったら大人に知らせる」という5つの事項を子どもがしっかりと実践できさえすれば、子どもの犯罪被害の防止に十分であるのかという点については疑問が持たれる。

本研究では、以上の問題意識に基づき、2000年から2009年の10年間に日本国内で出版された小学生の防犯に関する市販書籍のうちから具体的な防犯対策が記述されている書籍を対象に、そこに記されている小学生の犯罪被害防止に関する記述を抽出し、現在の小学生の防犯に関して市販書籍で述べられている事項を明らかにし、子どもの防犯のために重要と考えられている事項の内容と小学生の防犯教育において教えるべき事項について一定の共通認識（コンセンサス）が形成されているかどうかを検証することを目的とした。

## 2. 方法

### 1) 子どもの犯罪被害と防犯に関する市販書籍の抽出

小学生以下の子どもの犯罪被害と防犯に関する書籍の年別出版数の動向を観るために、国立国会図書館NDL-OPAC書誌拡張検索とAmazon社ホームページ（Amazon.co.jp）の和書検索を用い、第1キーワードに「子ども」・「子ども」・「児童」・「小学生」・「少年」・「少女」・「親」・「親子」・「学校」・「小学校」の10通りの用語を、第2キーワードに「防犯」・「犯罪」・「危険」・「安全」・「被害」の5通りの用語を用い、第1キーワードと第2キーワードの組み合わせによる合計50通りの書籍の検索を2000年から2009年の10年間の出版書籍について行い、小学生の防犯対策について記載された市販書籍を検索した。なお、定期刊行雑誌類と一般に市販化されていない地方自治体の教育委員会・行政機関等による出版物等は対象から除外した。さらに、検索された書籍のうち、「非行」・「家庭内暴力と虐待」・「学校内での安全（侵入者対策等）」・「いじめ」・「不登校」などの問題に内容が特化している書籍も対象から除いた。

本研究では、上記の書籍検索で検索された市販書籍のうち表1に示した条件を満たす書籍を全て検討の対象とした。表1に示した条件うち、「小学生の防犯対策について40ページ以上の記載がある書籍」と限定した理由は、

**表1 小学生の防犯対策の内容について検討対象とした書籍の条件**

1. 2000年から2009年の間に出版された書籍を検討対象とする
2. 小学生の防犯対策について具体的な記載がある書籍を検討対象とする
3. 小学生の防犯対策について40ページ以上の記載がある書籍を検討対象とする
4. 海外で出版された著書を翻訳した書籍は検討対象から除外する
5. 小学生の防犯対策のうち特定の問題（インターネット使用での防犯対策など）のみについて記載された書籍は検討対象から除外する
6. 小学生が被害に遭った特定の犯罪事件についてのみ記載された書籍は検討対象から除外する

40ページ未満の書籍には幼児から小学生の低学年までを対象とした絵本が複数あり、具体的な防犯対策に関する記載内容が極めて限られた書籍が含まれてしまい、書籍間の内容を比較検討するうえで支障をきたすためである。また、海外で出版された書籍を翻訳した市販書籍を対象検討から除外した理由は、国により治安状況や子育ての慣習等にも違いがあり、書籍の内容を比較検討するうえで、海外に特異的な事項が入る可能性が否定できないためである。さらに、「インターネットや携帯電話の使用での犯罪被害防止」等の特定の課題に内容が限られている書籍についても、記載内容が偏り、書籍間の内容を比較検討するうえで支障をきたすため、検討の対象から除外した。なお、同じ書名のもとシリーズで出版されている書籍（「第1巻」～「第4巻」など）は全体で1冊とし、シリーズの最初の書籍の出版年を書籍全体の出版年とした。

**2) 近年の子どもの防犯に関する市販書籍の防犯対策の内容の検討**

表1の条件を満たした検討対象書籍について、書籍中に記載された小学生の防犯や犯罪被害に関する記述を全て抽出し、表2に示した21のカテゴリー別にその記載内容を分類し、記載内容を項目別にまとめた。なお、同じ防犯対策について反対の表現がされている場合（例1：「街灯の無い暗い道は危険」と「街灯のある明るい道は安全」、例2：「防犯ブザーはカバンの中などに入れて歩くとすぐに使えないのでいけない」と「防犯ブザーはすぐに使える場所に身につけて歩く」など）については、「安全」という記載と「危険」という記載（例1の様な場合）については同じ内容ならば全て「危険」という項目にまとめた。また「〇〇をしてはいけない」という記載と「△△をする」という記載（例2の様な場合）については、同じ内容ならば全て「△△をする」という項目にまとめた。以上の作業により、検討対象書籍の記載項目をまとめ、表2の22のカテゴリー別にそれぞれ防犯対策に関わる項目の数と、その項目について記載のある書籍数を集計した。

次に、表2の全てのカテゴリーを通して、記載のある書籍数の多い順に防犯対策に関わる項目を並べ、どのような内容の項目が多く書籍に記載されているのかを調べた。また、記載のある書籍数の多い事項について、記載の有無に書籍による偏りがないかを確認するために、記載書籍数が多かった上位20項目について、それぞれ事項の各書籍での記載の有無を調べ、記載の無い度数について書籍間の記載率の統計的有意差を $\chi^2$ 検定により調べた。さらに検討対象とした33書籍において上位20項目の各項目の記載がある場合を1点、記載がない場合を0点と得点配分し、統計ソフトSPSS17.0Jを用い一元配置分散分析を行い、等分散が仮定されていない場合のTamhaneのT2検定およびGames-Howellの検定により検討対象書籍の間の記載率の統計的有意差の有無を検証した。

**表2 小学生の防犯対策に関するカテゴリー**

1. 通学路・道での安全確保と歩き方 (防犯ブザー等の防犯用品の携帯も含む)	12. エレベーター利用における防犯
2. 屋外の危険な道・場所 (公園を除く)	13. インターネット・携帯電話利用における防犯
3. 不審者・危険な人について	14. 電車・バス・駅での防犯
4. 声かけ・誘い等とその対応	15. 地域の防犯対策
5. 自動車に関する防犯	16. 学校における防犯対策防犯教育等
6. 公園での防犯	17. 学校・家庭での防犯教育 (安全マップ等の作成も含む)
7. デパート・ショッピングモールや繁華街での防犯	18. 家庭でのしつけ・ルールと親子関係
8. 外で遊ぶ時や外出時の防犯	19. 金銭・物品に関する防犯
9. マンション・集合住宅での防犯	20. 犯罪遭遇時の対応
10. 一戸建ての家の防犯	21. 子供が犯罪に遭った時の対応
11. 留守番での防犯	22. その他

また、どの様な場所が犯罪に遭う危険がある場所と記載されているかを観るために、家の外で犯罪に遭う危険のある場所に関する記載の内容と記載のある書籍数を集計した。さらに、犯罪企図者からの「声かけ」のパターンの内容と「声かけ」に対する対応について記載している書籍数を集計した。

### 3. 結果

#### 1) 小学生の防犯対策に関する検討対象書籍と防犯対策等の記載数

国立国会図書館NDL-OPAC書誌拡張検索とAmazon社ホームページの和書検索により前述のキーワード検索を行った結果、2000年から2009年の10年間に181書籍が検索された。そのうち、表1に示した条件を満たす書籍は全部で33書籍であった(表3)。この33書籍の出版年は、2006年に出版された書籍が13書籍と全体の39.3%を占めていた。ついで2007年に出版された書籍が6書籍、2005年に出版された書籍が5書籍であり、2005年から2007年の3年間に出版された書籍が合計24書籍と検討対象33書籍の72.7%を占めていた。

検討対象とした33書籍に記載されていた小学生の防犯対策に関する具体的な事項の記載数は、最も多く記載が

あった書籍(書籍番号25)で307項目、最も記載が少なかった書籍(書籍番号1)で66項目であり、33書籍の記載項目数は平均190.6±54.7項目であった。

#### 2) 小学生の防犯に関する各カテゴリーの防犯対策等の項目数

検討対象とした33書籍に記載された小学生の防犯対策に関する記載は総計6761記載あり、同じ内容の記載を一つの項目としてまとめると防犯対策に関わる項目の総数は1824項目であった。表2の各カテゴリー別に小学生の防犯に関わる項目数と全体に占める割合を図1に示した。なお、「その他」のカテゴリーには「小学生の犯罪被害の発生状況」、「塾に関連した事項」、「プールや遊園地での防犯」、「犯罪企図者から狙われやすい子どものタイプ」、「自転車に関する防犯」などが含まれている。

カテゴリー別の防犯に関わる項目数は「通学路・道での安全確保と歩き方」(156項目, 8.6%)、「声かけとその対応」(148項目, 8.1%)、「留守番での防犯」(139項目, 7.6%)、「不審者・危険な人」(136項目, 7.5%)、「屋外での危険な道・場所(公園を除く)」(131項目, 7.2%)、「学校・家庭での防犯教育」(119項目, 6.5%)、「犯罪遭遇時の対応」(102項目, 5.6%)の順に多かった(図1)。

#### 3) 検討対象書籍で記載数が多かった項目

全てのカテゴリーを通して、検討対象33書籍のうち小

表3 検討対象とした小学生の防犯対策に関する書籍

書籍番号	書籍名	著者または監修者	出版社	出版年/月	引用文献番号
1	誘かいや暴力から命を守ろう	池田 實 (著)、川邊重彦・岩切玲子 (監修)	小峰書店	2002/04	4)
2	親子で覚える徹底安全ガイド	佐伯幸子	主婦の友社	2003/02	5)
3	危険回避・被害防止トレーニング・テキスト	横矢真理 (著)、小宮信夫 (監修)	栄光	2003/02	6)
4	ぼくたちの危険攻略ファイル	戸田芳雄	教育画劇	2004/02.03	7), 8)
5	Say "No!" "やめて!" という	安藤由紀・かりやぞの のり子	岩崎書店	2004/03	9)
6	身近な危険から子どもを守る本	横矢真理	大和書房	2004/07	10)
7	犯罪の危険から子どもを守る!	横矢真理	学習研究社	2005/01	11)
8	親子で学ぼう! 子どもを危険から守る		ブティック社	2005/03	12)
9	親子で実践! 犯罪・危険・事故回避マニュアル	小宮信夫	主婦と生活社	2005/04	13)
10	こんなとき、どうする? 子どもセーフティーマニュアル	セーフティ教育研究会	日本標準	2005/08	14)
11	犯罪から子どもを守る50の方法	国崎信江	ブロンズ新社	2005/12	15)
12	子どもの安全ハンドブック	森 健・子川 智・岩崎大輔	山と溪谷社	2006/03	16)
13	狙われない子どもにする! 親がすべきこと39	国崎信江	扶桑社	2006/04	17)
14	犯罪から子どもを守る! ハンドブック		あおば出版	2006/04	18)
15	親子でまなぶ子どもの防犯ガイド	柿沼信之	角川学芸出版	2006/05	19)
16	名探偵コナン防犯テクニク	青山剛昌	小学館	2006/05	20)
17	こどものあんぜんどくほん	国崎信江	太陽出版	2006/06	21)
18	カルタで覚える ドラえもん あんしん・あんぜん教室	ALSOK あんしん教室	小学館	2006/07	22)
19	子どもの安全はこうして守る!	清永賢二・村上信夫・宮田美恵子	グラフ社	2006/07	23)
20	親子でトライ!! クイズ 子どもの安全なるほどブック	キッズニュース研究会・ママたちネットワーク	海苑社	2006/08	24)
21	元刑事が教える子どもの安全新常識!	中島正純	ベストセラーズ	2006/09	25)
22	わが家のチャイルドセキュリティ	国崎信江	一ツ橋書店	2006/10	26)
23	犯罪・事故から子どもを守る学区と学校の防犯アクション41	寺本 潔	黎明書房	2006/10	27)
24	犯罪から身を守る絵事典	国崎信江・Kセキュリティ株式会社	PHP 研究所	2006/11	28)
25	じぶんをまもろう みんなをまもろう	横矢真理 (監修)	学習研究社	2007/02	29), 30), 31), 32)
26	親子でできる防犯力	石井栄子	フレーベル館	2007/03	33)
27	お父さんは、子どもを守るか!?	近藤 卓・ALSOK あんしん教室	日本文教出版	2007/03	34)
28	子どもを守る! ママとパパのファミリー安全ブック	佐伯幸子	メイツ出版	2007/04	35)
29	ワークシートで身につける! 子どもの危険予測・回避能力	渡邊正樹	光文書院	2007/05	36)
30	親子で学ぶ「子どもの防犯」ワークブック	小宮信夫 (監修)	東京書籍	2007/06	37)
31	親子で学ぶ防犯の知恵	佐伯幸子	少年写真新聞社	2007/07	38)
32	防犯先生の子どもの安全マニュアル	清永賢二	東洋経済新報社	2008/04	39)
33	安全な毎日を送る方法	国崎信江、宮田 仁 (監修)	学習研究社	2009/02	40), 41)

学生の防犯対策に関わる事項で記載書籍数が多かった上位63位までの項目を表4に示した。全ての項目のうち最も記載数が多かったのは「危険を感じたら大声を出す」で33書籍全てに記載されていた。しかし、33書籍の全てにおいて記載を認めた項目はこの1項目のみであり、90%以上の書籍(30書籍以上)で記載されていたのは「人気がなく人目につき難い場所は犯罪に遭う危険があるので気をつける」と「夜の道は犯罪に遭う危険性が高いため気をつける」(32書籍)、「犯罪に遭いそうになったら防犯ブザーを鳴らす」(31書籍)、「通学路や遊びに外出する地域の安全マップを作成する」と「路上に駐停車している自動車に気をつける」(30書籍)で、1番目の「危険を感じたら大声を出す」を加えても6項目のみであった。さらに80%以上の書籍(27書籍以上)で記載がある項目についても、該当するのは表5に示した項目のうちの上位16項目のみであった。

この様に検討対象とした33書籍の大多数に共通して記載されている項目に限られていた理由として特定の書籍に偏って記載が無い可能性が考えられたため、記載書籍数が多かった上位20位までの項目(20位目の項目が同数で4項目あったため実際には上位23項目)について各書籍での記載の有無を検討し、その結果を表5に示した。結果として、上位23項目の全てが記載されていたのは書籍番号18のみであり、1項目のみ記載がなかったのは書籍番号22、書籍番号25の2書籍のみであった。逆に最も上位23項目について記載が少なかったのは書籍番号1、

書籍番号24、書籍番号26で上位23項目中7項目が記載されていなかった。しかし、表5が示すように、上位23項目のいずれかが記載されていない書籍はほぼ全体に分散して認められ、上位23項目に関する33書籍の記載のない項目数は平均 $3.48 \pm 1.80$ 項目であった。 $\chi^2$ 検定では上位23項目すべてが記載されている書籍と上最も記載数が少なかった書籍の間の $\chi^2$ 値は0.515であり、記載率について危険率5%未満での統計的有意差は認めなかった。さらに、上位20項目の各項目の記載がある場合を1点、記載がない場合を0点と得点配分し検討対象とした33書籍間の記載率の差について分散分析を行った結果、等分散が仮定されていない場合のTamhaneのT2検定およびGames-Howellの検定では33書籍のいずれの間にも上位23項目の記載率に統計的有意差は認めなかった。以上の検討から、検討対象33書籍の大多数に共通して記載されている項目の数が限られていた理由は、特定の書籍に偏って記載がないことが影響したからではないと判断された。

#### 4) 犯罪に遭う危険があるとされている場所について

検討対象33書籍のうち28書籍(84.8%)で「どのような場所が犯罪に遭う危険がある場所か知っておく」と記載されていた。そこで、検討対象とした33書籍において家の外のどのような場所が犯罪に遭う危険があるとされているかという点について検討した。

検討対象とした33書籍の記載を合わせると、犯罪に遭う危険のある場所として161の場所が指摘されていた。図

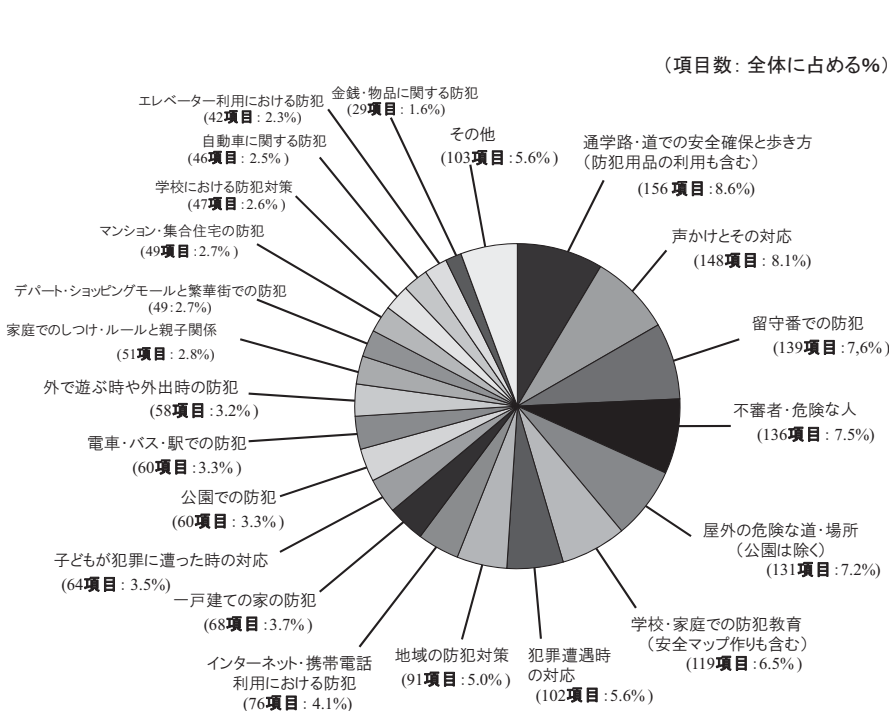


図1 検討対象33書籍に記載されたカテゴリー別の小学生の防犯対策に関する項目数

2に5書籍以上で記載されていた家の外で犯罪に遭う危険のある場所43項目とその記載書籍数を示した。表4に示した上位63項目の中にある「人気がなく人目につき難い場所」32書籍(97.0%)、「夜の道」30書籍(90.9%)、「人目の届かない駐車場」26書籍(78.8%)、「公園の中の茂みなどで見通しの悪い場所」および「公園などの公衆トイレ」が24書籍(72.7%)、「暗い道」および「人気の無い家や廃屋」が21書籍(62.5%)、「落書きやゴミが多い場所」・「歩道やガードレールが無い道」および「繁華街などの人ごみのある場所」が20書籍(60.6%)、「高い塀や生け垣などが並び死角の多い場所」および「周囲から見

表4 検討対象33書籍で小学生の防犯対策に関して記載が多かった上位63項目

項目番号	内容	記載のある書籍数	項目番号	内容	記載のある書籍数
1	危険を感じたら大声で叫ぶ	33	34	普段から大声を出す練習をしておく	23
2	人気のなく人目につき難い場所は犯罪に遭いやすいので気をつける	32	35	留守番の時に家に帰ったら、必ずすぐに玄関の鍵をかける	
3	夜の道は犯罪に遭う危険性が高いため気をつける	31	36	危険なことや変なことがあったらすぐに大人に知らせる	
4	犯罪に遭いそうになったら防犯ブザーを鳴らす	30	37	外では一人で遊ばない	22
5	通学路や遊びに外出する地域の安全マップを作成する				
6	路上で駐停車している自動車に気をつける				
7	犯罪者が「道が判らないから、教えてくれる？」と声をかけてくることがあるので気をつける	29	38	防犯ブザーはすぐに使える場所に置いておく	21
8	いつも防犯ブザーを持ち歩く	28	39	普段から防犯ブザーを使う練習をしておく	
9	危険を感じた時にはすぐに走って逃げる				
10	どこが危険な場所かを知っておく				
11	危険なことや怪なことがあったら何でも親に必ず報告する	27	40	エレベーターで危険を感じたら非常ボタンやどの階でもよいからボタンを押し降りる	20
12	他人の自動車には乗らない				
13	自動車に乗った人から声をかけられても、車には近づかない				
14	犯罪者が「家の人がケガ（病気）で病院に連れてかれたから、一緒に病院に行こう」と声をかけてくることあるので気をつけ、その時には家族に連絡を取る	26	41	普段から近所の人に挨拶し、顔を覚えてもらう	19
15	留守番の時は、家にだれもいなくても「ただいま」と言って家に入る				
16	エレベーターに1人で乗るときは操作パネルの近くに背中をつけ、周囲がよく見えるように立つ				
17	どこが安全な場所か、何かあったら逃げ込める場所かを知っておく	25	42	昼間でも暗い道は犯罪に遭う危険があるので気をつける	20
18	子ども110番の家がどこにあるか知っておく				
19	人目の届かない駐車場所は犯罪に遭う危険があるので気をつけ、駐車場内で遊んだりしない				
20	知らない人にはついていかない	24	43	外や友達の家へ遊びに行くときには、何時に帰るか保護者と約束し、帰宅時間を守る	19
21	他人とは常に適切な距離を置いて離れるようにする				
22	面白そうな事や子どもが興味を持つものなどで誘ってくる人には気をつけ、近寄らない				
23	危険を感じたら子ども110番の家や休館（コンビニエンスストアなど）に逃げ込む	24	44	人気のない家、庭屋に立ち入ると犯罪に遭う危険がある事を知っておく	19
24	子どもの犯罪被害防止には地域住民の協力が重要である				
25	外を歩く時にはできるだけ1人にならないようにする				
26	保護者に言わずに勝手に外に遊びに行かない	24	45	家族が留守中の家に帰る時には、人に気づかれないようにカギを持ち歩く	19
27	木が茂るなど見通しの悪い場所がある公園は犯罪に遭う危険があるので気をつける				
28	公園などにある公共トイレは危険なことがあるので、1人では行かないようにする				
29	マンション・集合住宅のエレベーターは犯罪に遭う危険があるので気をつける	24	46	地域住民・保護者の地域の防犯パトロールを行う	19
30	留守番中は来訪者があっても応答しない				
31	留守番の時は家の中に子どもだけであることを知られないようにする				
32	留守番の時は家の鍵を開ける前に周囲に怪しい人がいないかを確認する	24	47	落書きやゴミが多い場所は犯罪に遭う危険があるので気をつける	19
33	安全マップを作る時には安全な場所や何かあったら逃げ込める場所も書き込む				

表5 小学生の防犯対策に関して記載が多かった上位23項目の各書籍における記載の有無

	書籍番号																																				
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33				
項目1	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎			
項目2	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		
項目3	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		
項目4	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		
項目5	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		
項目6	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		
項目7	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		
項目8	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		
項目9	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
項目10	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
項目11	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
項目12	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
項目13	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
項目14	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
項目15	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
項目16	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
項目17	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
項目18	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
項目19	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
項目20	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
項目21	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
項目22	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
項目23	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎

◎ は記載がある項目      ■ は記載がない項目

小学生の防犯に関する市販書籍における犯罪被害防止対策の内容に関する検討

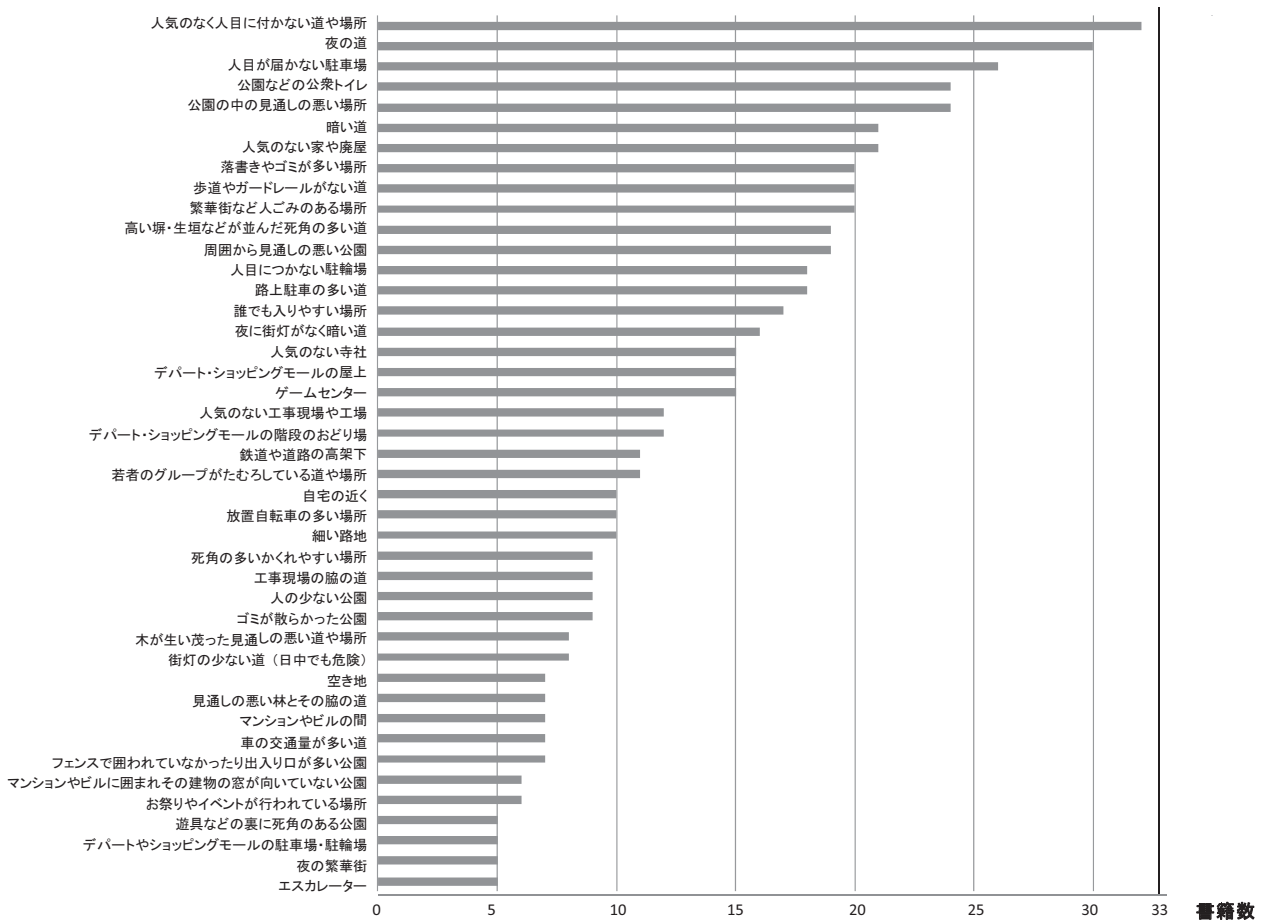


図2 検討対象33書籍のうち5書籍以上で記載された犯罪に遭う危険のある場所と記載書籍数

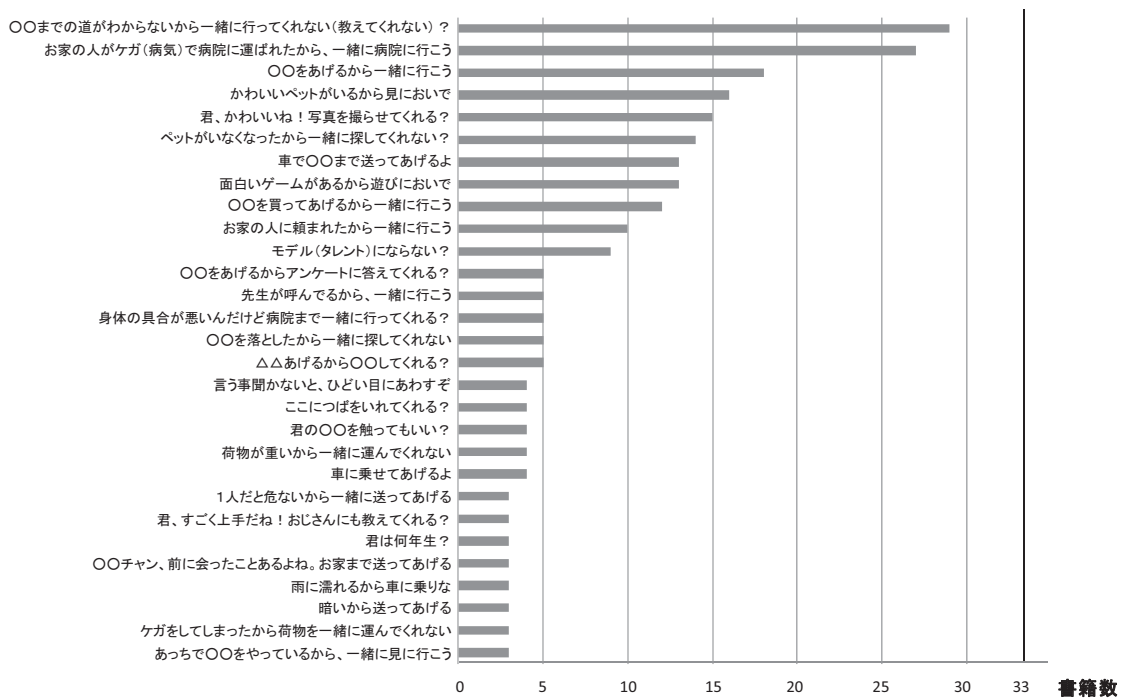


図3 検討対象33書籍のうち3書籍以上で記載された「声かけ」のパターンと記載書籍数

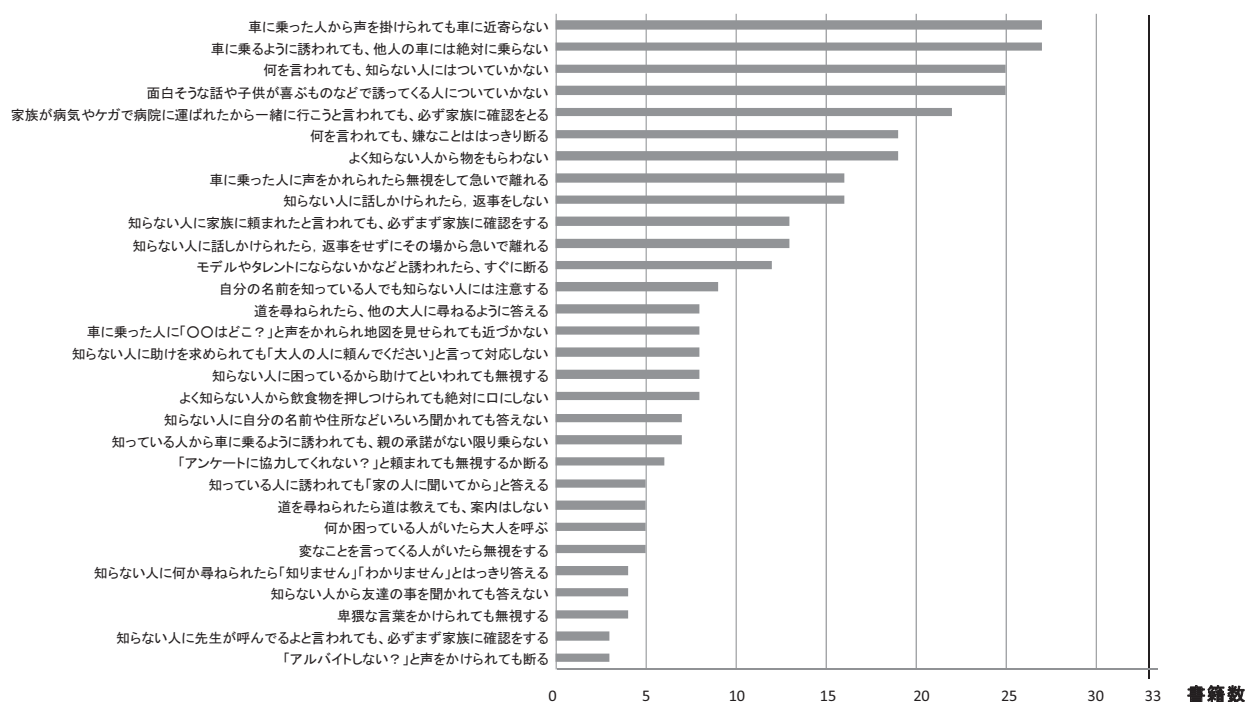


図4 検討対象33書籍のうち3書籍以上で記載された「声かけ」に対する対応と記載書籍数

通しの悪い公園」が19書籍（57.6%）で犯罪に遭う危険のある場所として記載されていた。その他、検討対象書籍の40%以上の書籍（14書籍以上）で記載があった家の外で犯罪に遭う危険のある場所としては、「人目のつかない駐輪場」と「路上駐車が多い道」が18書籍（54.5%）、「誰でも入りやすい場所」が17書籍（51.5%）、「夜に街灯がなく暗い道」が16書籍（48.5%）、「人気のない寺社」・「デパート・ショッピングモールの屋上」および「ゲームセンター」が15書籍（45.5%）に記載されていた。

一方、家の外で犯罪に遭う危険のある場所として記載されていた161項目のうち65項目（40.4%）が1書籍のみでの記載に、29項目（18.0%）が2書籍のみでの記載に留まっており、検討対象33書籍のうち1書籍または2書籍のみで記載されている項目が犯罪に遭う危険があると指摘されている場所全体の58.4%を占めていた。

### 5) 犯罪企図者の「声かけ」パターンと「声かけ」への対応について

図1に示した小学生の防犯対策に関わる事項のカテゴリー別項目数では「声かけとその対応」に関する項目が2番目に多かった。そこで、具体的に検討対象とした33書籍の中で、どの様な「声かけ」のパターンが指摘され、さらに「声かけ」に対してとるべき対応がいかに記載されているのかを調べた。

犯罪企図者の「声かけ」のパターンについては、検討対象33書籍の全てで記載があり、全体で総数86項目の「声かけ」のパターンが記されていた。犯罪企図者の「声か

け」のパターンについて86項目のうち3書籍以上に記載があった28項目とその記載書籍数を図3に示した。犯罪企図者の「声かけ」のパターンとして記載が多かったのは、「〇〇までの道が判らないから教えてくれる？」が29書籍（87.9%）、「お家の人がケガ（病気）で病院に運ばれたから、一緒に病院に行こう」が27書籍（81.3%）で、これらの項目は表4に示した上位63項目の中に含まれていた。しかしそれ以外では、「〇〇あげるから一緒にいこう」は18書籍（54.5%）に認めたが、「ペットがいなくなったから一緒に探してくれない？」（14書籍：42.4%）、「車で〇〇まで送ってあげるよ」と「面白いゲームがあるから遊びにおいで」（13書籍：39.4%）、「〇〇買ってあげるから一緒にいこう」（12書籍：36.7%）、「お家の人に頼まれたから一緒にいこう」（10書籍：30.3%）などの「声かけ」パターンについては検討対象33書籍のうち50%未満の書籍での記載に留まっていた。

一方、「声かけ」に対する対応については、検討対象とした33書籍で68項目が記されていた。そのうち3書籍以上に記載があった30項目とその記載書籍数を図4に示した。「声かけ」に対する対応としては、表4の上位63項目の中にある「車に乗るように誘われても絶対に乗らない」と「車に乗った人から声をかけられても車に近寄らない」が27書籍（81.8%）、「何を言われても、知らない人にはついていけない」および「面白そうな話や子どもが喜ぶ物などで誘ってくる人にはついていけない」が25書籍（75.8%）、「家族が病気やケガで病院に運ばれたから一



緒に行こう』と言われても、必ず家族に確認を取る」が22書籍(66.7%)、「何を言われても、嫌なことははっきり断る」および「よく知らない人から物をもらわない」が19書籍(57.6%)の順に記載書籍数が多かった。それ以外では、「車に乗った人から声をかけられたら無視をして急いで離れる」と「知らない人から話しかけられても返事をしない」が16書籍(46.9%)、「知らない人に家族に頼まれたと言われても、必ずまず家族に確認をとる」と「知らない人に話しかけられたら、無視をしてその場から急いで離れる」が13書籍(39.4%)の順であった。

知らない人から声をかけられた時の対応としては、「無視をする」や「返事をしない」と記載してある書籍がある一方で、「大人に聞くように答える」が8書籍(24.2%)、「道を教えても案内はしない」が5書籍(15.2%)など、注意しながら一定の対応をするように記載している書籍もあり、声をかけられた時の対応に関する見解が書籍により異なっていた。

なお、「自分の名前を知っている人でもよく知らない人には注意する」などの事項は、子どもの防犯において極めて重要な事項だと考えられるが、この事項を記載した書籍は8書籍(25.0%)のみに留まっていた。

#### 4. 考察

WHOがスウェーデンのカロリンスカ研究所およびカナダのケベックのCommunity Safety Promotion WHO協働センターと協働して推進しているSC活動およびSP活動は、基本的に外傷の防止に主眼が置かれており、高齢者の外傷防止や子どもの学校や遊戯中の外傷防止、交通事故の防止などはその活動の対象として受け入れやすい課題であると思われる。一方で、犯罪被害の防止については、社会的な様々な要因が関与しており、また犯罪被害が必ずしも身体的な外傷を伴わないことも少なくないため、SC活動およびSP活動の中で犯罪被害の防止を活動の中心的課題として位置づけるのは難しいことも思料される。しかし、本論文の冒頭で述べた通り、カロリンスカ研究所のCommunity Safety Promotion WHO協働センターが提示したセーフコミュニティ認証基準<sup>1)</sup>では9つの取組むべき具体的な課題の例の中に「子どもの安全」と「暴力による外傷防止」が明記されており、その意味から「子どもの犯罪被害の防止」はSC活動およびSP活動において看過できない課題であると考えられる。また、WHOが示した安全の定義<sup>2)</sup>では、「安全とは身体的、心理的、物的な危険や損害をもたらす要因が制御(control)された状態である」と述べられており、その観点からもSC活動およびSP活動は身体的な安全のみならず、心理的・物的な安全についても視点を広げるべきである。高

表6 小学生の防犯のために重要と考えられるその他の事項

	記載書籍数	記載率		記載書籍数	記載率
<b>通学路・道での安全確保と歩き方</b>			<b>インターネット・携帯電話の利用での防犯</b>		
・歩く時には常に周囲に気をつけて歩く	17	51.5%	・出会い系サイトにはアクセスしない	17	51.5%
・誰かついてきていないか後にも注意して歩く	14	42.4%	・インターネットや携帯メールで自分や友人の個人情報や伝えない	15	45.5%
・子ども110番の家の人と知り合いになっておく	10	30.3%	・インターネットや携帯電話は親と決めたルールに従って使う	14	43.6%
・夜は一人歩かない	10	30.3%	・インターネットや携帯電話でトラブルに遭ったらすぐに親に相談する	12	36.4%
・携帯電話や携帯メールをしながら歩かない	9	27.3%	・不審なサイトや有害サイトにはアクセスしない	12	36.4%
・持ち物の目立つところに名前を書かない	8	24.2%	<b>地域の防犯対策</b>		
・自転車に乗って近づいてくる人にも注意する	5	15.2%	・地域住民も子どもの通学路や遊び場に普段から目を配る	11	33.3%
・保護者は子供の下校時間を把握しておく	3	9.1%	・地域住民は不審人がいたら積極的に声をかける	8	24.2%
<b>不審者・危険な人/声かけと対応</b>			・防犯において危ないところは地域で積極的に改善する	5	15.6%
・不審者の声かけパターンを知っておく	16	48.5%	<b>家庭での防犯教育</b>		
・知らない人とはどんな人かという概念をはっきりもたせる	12	36.4%	・テレビなどでの犯罪のニュースについて親子で対応を話し合う	14	43.6%
・女性や中学生・高校生でも犯罪者になりうることを知っておく	12	36.4%	・性犯罪に遭うのは子どもが悪いからではないと言う認識を親子でしっかりもつ	14	43.6%
・不審者の固定概念をもたない	11	33.3%	・普段から「もしこういことがあったらどうする?」「どうしてこうなったのかな?」と親子で話をしておく	12	36.4%
<b>留守番での防犯</b>			・プライベートゾーンについて教え、他人に見せたり触らせてはいけないことを認識させる	11	33.3%
・留守番中に誰か訪ねてきててもドアは開けない	18	54.5%	・親が犯人役になり襲われた時に逃げるロールプレーをしておく	11	33.3%
・留守番で家に帰ったとき、必ず鍵とチェーンをかける	16	48.5%	・安全マップの内容を定期的にチェックし、作り替える	10	30.3%
・親子で留守番の時の約束事をきめておく	13	39.4%	・不審者の声かけに対応する練習をしておく	9	27.3%
・留守番中は他人を家の中に入れない	12	36.4%	・防犯のために大切なことは子供に繰り返して教える	8	24.2%
・留守番のとき来訪者は制服を着ていても十分に注意する	12	36.4%	・性的犯罪がどのようなか子どもに教える	8	24.2%
・留守番のとき家に入ったら窓なども戸締りし施錠を確認する	5	15.2%	<b>犯罪遭過時の対応</b>		
<b>外出時の防犯</b>			・何かあったら人のいる方向に逃げる	17	51.5%
・親が不在で遊びに行くとき時にはどこに行くかメモ等に書いて知らせる	8	24.2%	・危険を感じ大声を出すとき「キヤー」「ワー」と叫ぶのは良くない	14	42.4%
・外出から帰宅が遅れるときには必ず電話で連絡させる	7	21.2%	・何かあったら相手や車の特徴を覚えておく	14	42.4%
・保護者は子供の遊ぶ場所・エリアを知っておく	3	9.1%			
<b>マンション・集合住宅の防犯・エレベーター利用における防犯</b>					
・オートロックのマンションでも不審者が侵入し得るので注意する	13	39.4%			
・エレベーターに変だと思ふ人が乗ってきたら、すぐに降りる	13	39.4%			
・エレベーターに乗る前に周りに怪しい人がいないかよく見て乗る	5	15.6%			

年齢者の転倒外傷や子どもの遊戯中の事故、交通事故などに比べ、子どもの犯罪被害は発生頻度は低く、身体的外傷も軽症で済む場合も少なくないが、一度犯罪被害が発生してしまえば被害者には心理的に大きなトラウマを与える。また、誘拐などの重大犯罪が発生した場合には、社会的不安、特に同年代の子どもがいる家庭には大きな不安を与えることになる。したがって、SC活動およびSP活動においても「子どもの犯罪被害の防止」について可能な取組みを行うべきであると考えられる。さらに、一般市民の視点に立てば、「セーフコミュニティ（安全なコミュニティ）」とは、一般的な外傷の発生が十分に予防されているだけでなく、治安が保たれ安心して子育てができる地域社会であると考えるのが自然な発想だと思われる。

日本における犯罪発生の動向と現状については、2000年代前半以降、体感治安の悪化が指摘されて久しい<sup>42, 43)</sup>。内閣府が2006年に実施した「治安に関する世論調査」において、「ここ10年間で日本の治安はよくなったと思うか、それとも悪くなったと思うか」という質問に対して「悪くなったと思う」とする回答者の割合が84.3%（「どちらかといえば悪くなったと思う」46.6%、「悪くなったと思う」37.7%）を占めていた<sup>43)</sup>。実際には、警察庁が公表した犯罪統計に基づくと、1999年以降の過去10年間における12歳以下の子どもの犯罪被害は、被害件数が1999年の年間31,835件に対し、2001年には年間39,934件と1.25倍に増加し過去10年間の最高値を認め、その後も2004年までの3年間は毎年37,000件以上と高い被害の発生が持続した<sup>44)</sup>。しかし、2004年までをピークに、13歳未満の子どもの犯罪被害は2005年以降には減少傾向に転じ、2009年の12歳以下の子どもの犯罪被害件数は年間33,480件（うち6歳～12歳の被害は33,128件）にまで減少してきている<sup>44, 45)</sup>。一方、子どもの殺人被害と略取・誘拐被害という重大被害については、1999年には13歳未満の子どもの殺人被害は87件、略取・誘拐被害は100件であったのに対し、2004年には子どもの殺人被害が111件、略取・誘拐被害は141件といずれも過去10年間で最も高い被害の発生を認め、2005年以降は、略取・誘拐被害は年々減少傾向を示し、2008年には63件にまで減少したのに対し、殺人被害は2004年以降も高い被害の発生が持続し、2009年には140件（うち6歳～12歳の被害は96件）と過去10年間で最高の発生を認めている<sup>44, 45)</sup>。

警察庁が公表した最新の統計である「平成21年の犯罪情勢」によれば、2009年の1年間の13歳未満の子どもが被害者となった性犯罪では、強制わいせつ被害は936件（2003年は2,087件）、強姦被害は53件（同93件）、わいせつ目的略取誘拐被害は25件（同56件）を認めている<sup>46)</sup>。

この被害発生件数は、1日に約3人の子どもが強制わいせつの被害に遭い、1週間に1人の子どもが強姦被害に遭い、かつ2週間に1人の子どもがわいせつ目的の誘拐被害に遭っている事を意味している。警察庁の犯罪統計では子どもの性犯罪被害が家庭内暴力などの家族・親族によるものか親族以外によるものかは判別できないが、いずれにせよこの現状は市民の安全、特に子どもの安全を考える上で重く受け止めなくてはならない事実である。

子ども達の痛ましい犯罪被害を減少させるために、地域の防犯力の強化などと伴に、子どもに対する防犯教育を充実させることは極めて重要な意味を持つ。2004年に警視庁が公表した標語「いかのおすし」<sup>3)</sup>は、現在では全国的に普及しており、子どもへの防犯教育における一つのコンセンサスと言ってよいと考える。2009年に東京都教育委員会が発行した「安全教育プログラム」の中にも、小学校の低学年から高学年にわたり防犯対策の基本として「いかのおすし」を徹底して理解し実践するための教育を行うことが学年別・月別の教育カリキュラムの中に繰り返し記載されている<sup>47)</sup>。しかし、この「いかのおすし」以外の子どもへの防犯教育において教えるべき事項に関するコンセンサスの存在の有無については、これまで明らかな検討はなされていない。

米国の犯罪心理学者Carol Copeは1997年の著書「Stranger Danger」の中で、1990年代に米国で増加した子どもの犯罪被害を受けて、「子どもへの犯罪企図者の手口は巧妙化しており、いわゆる知り合いによる犯罪も増加している」ことを指摘している<sup>48)</sup>。さらにCopeは同書の中で、犯罪企図者が子どもに接触するパターンとして「行きずりタイプ」(stranger type)と「仲良しタイプ」(pal type)に分けられ、このうち特に「仲良しタイプ」の犯罪企図者は子どもにとっては犯罪を実行する以前に既に「顔見知り」で「好きな」存在であり、この「仲良しタイプ」の犯罪企図者からの犯行を子どもが未然に察知し回避することは困難であると述べている。確かにこのような、「顔見知り」の犯罪企図者に対して、「いかのおすし」の中の「知らない人にはついていかない」、「他人の車に乗らない」という事項を、果たして子ども達は実践できるか、強く危惧されるところである。「顔見知り」の犯罪や「知り合いのふり」をした犯罪など、巧妙化した手口で近づいてくる犯罪企図者による犯罪被害から子ども達を守るためには、「いかのおすし」に加え、さらなるコンセンサスに基づく子どもへの防犯教育の拡充が不可欠であると考えられる。

そこで本研究では2000年から2009年の10年間に出版された小学生の防犯を主題とした一般市販書籍を一定の条件下ですべて抽出し、結果として33書籍を対象に記載さ

れている小学生の防犯のために必要な事項を調べ、その中に共通に記されている小学生への防犯教育の内容に関するコンセンサスの有無について検討した。

検討対象とした33書籍のうち2005年から2007年の3年間に出版された書籍が合計24書籍と全体の72.7%を占めていたが、この期間の小学生の防犯関係書籍が多かった理由として、先述の通り13歳未満の子どもの犯罪被害が2002年から2004年をピークに増加していたことに加え、2003年の大阪府熊取町での小学4年生の少女行方不明事件、2004年の栃木県小山市での4歳と3歳の男児兄弟誘拐殺人事件、奈良県奈良市での小学校1年生の少女誘拐殺人事件、2005年の広島県広島市での小学校1年生の少女殺人事件、栃木県今上市での小学校1年生の少女誘拐殺人事件など、社会的にも大きな問題となった事件が連続したことが関わっている可能性も考えられる。

検討対象33書籍の内容を調べた結果、33書籍の全てに共通して記載が認められた事項は「危険を感じたら大声を出す」という1項目のみであった。さらに、90%以上の書籍(30書籍以上)で記載されていた項目は「人気がなく人目につき難い場所は犯罪に遭う危険が高いため気をつける」、「夜の道は犯罪に遭う危険が高いため気をつける」、「危険を感じたら防犯ブザーを鳴らす」、「通学路や遊びに外出する地域の安全マップを作成する」、「路上で駐停車している自動車には気をつける」という事項で、全ての書籍で記載があった「危険を感じたら大声を出す」を加えても合計6項目のみであった。この結果は、少なくとも一般の市販書籍のレベルでは、小学生の防犯に関わる書籍を出版するに当たって最低限記述しなくてはならない事項についてコンセンサスの形成が不十分であり、基本的にそれぞれの著者が小学生の防犯において必要と考える事項を各自の見解や考えに基づき執筆している現状を示しているものと判断される。

標語「いかのおすし」の示す事項については、「いかのおすし」のうち「知らない人についていけない」は25書籍(75.6%)、「他人の車には乗らない」は27書籍(81.8%)、「何かあったら大きな声を出す」は33書籍(100%)、「何かあったらたらすぐに逃げる」は28書籍(84.8%)、「何かあったらすぐに大人に知らせる」は22書籍(66.7%)であった。なお、「知らない人についていけない」という記載があったのは25書籍だったが、「知らない人に声をかけられても無視をする」という記載がある書籍が16書籍あり、このいずれかの記載がある書籍は30書籍(90.9%)であった。また、「何かあったらすぐに大人に知らせる」は21書籍での記載に留まっていたが、「変なことや嫌なことがあったら、何でも親に報告する」という項目は28書籍(87.5%)で記載されており、このいずれかの記載がある

書籍は31書籍(93.9%)であった。以上の結果から、「いかのおすし」という標語が公表された2004年以前に出版された書籍も含めて、この標語が示す5項目はいずれも80%以上の書籍で記載されていると解釈される。しかし、「知らない人についていけない」または「知らない人に声をかけられても無視をする」という記載がない書籍が3書籍、「他人の車には乗らない」という記載がない書籍が6書籍あったことは、これらの事項が小学生の重大犯罪による被害を防止するうえで極めて重要な事項であることから考えて看過できない。したがって、小学生の防犯に関する市販書籍の出版においては慎重な記述の選択を求めたい。

近年出版された小学生の防犯に関わる市販書籍が、基本的にそれぞれの著者が必要と考える事項を独自の知見や考えに基づき執筆しており、小学生の防犯教育の内容に関するコンセンサスの形成が不十分であることは、各書籍における「家の外で犯罪に遭う危険のある場所」および「『声かけ』への対応」の記載内容の検討結果でも示されている。「家の外で犯罪に遭う危険のある場所」については、全ての検討対象33書籍を合わせると161の場所が記されていたが、図2に示した様に、そのうち50%以上の書籍(17書籍以上)で記載されていたのは15の場所に留まっており、161項目のうち94項目(58.4%)については1書籍または2書籍のみの記載に留まっていた。また、「『声かけ』への対応」については、図6に示した様に、「車に乗った人に声をかけられたら無視をして急いで離れる」という記載が16書籍(48.4%)、「知らない人に話かけられたら無視をしてその場を急いで離れる」という記載が13書籍(39.4%)と、基本的に「知らない人から声をかけられても無視をする」という書籍が多かったが、「道を尋ねられたら大人に聞くように答える」が8書籍(24.2%)、「道を尋ねられたら道を教えても案内はしない」が5書籍(15.2%)など、「無視をする」とする書籍と「注意をしながら一定の対応をする」とする書籍に分かれていた。

このように小学生の防犯対策について未だ十分なコンセンサスが形成されていない背景として、①この分野における討論会や公開シンポジウムなどが十分に機能するに至っておらず意見や情報を交わす場が不足していること、②近年、携帯サイトなどを利用した地域の防犯情報・不審者情報の配信が普及しつつあるが、全国レベルで犯罪情報を共有するには至っておらず、情報源が不十分なこと、③警察等が公表する犯罪に関する情報は数値的に統計化されたものであり、より詳細な犯罪発生状況についての情報入手が一般には困難なこと、④少なくとも日本においては犯罪学・防犯学の学術分野の歴史が浅く、

より有効で現状に則した防犯対策を唱えるうえで科学的知見が不足している事などが考えられる。

このうち、②の防犯情報・不審者情報の全国レベルでの共有化については、例えば京都府警察は「子ども安全情報」というWebサイトを設けて、限られた文字数の中で子どもへの犯罪や「声かけ」・不審者遭遇情報を提供しており、実際どのような「声かけ」がなされているのかを知ることができる<sup>49)</sup>。このような質の高い情報ソースが全国展開され、警察庁の犯罪統計等には載らないニアミス（ヒヤリハット）も含めた犯罪情報・不審者情報等が全国レベルで蓄積されることは、子どもの防犯対策の向上に大いに寄与するものと考えられる。この点について、斎藤らは「事象」・「地域空間」・「子どもの行動」・「地域特性」などを多層的に組み合わせたデータベースを開発し、その普及を通じた犯罪対策への活用を提案している<sup>50)</sup>。

また、③の警察等の犯罪情報の活用については、毎年、警察庁は前年の「犯罪情勢」として、犯罪の動向や発生状況および事例に関する報告書を発行している。これらの統計は、犯罪の傾向や推移を知るうえでは大変有意義であるが、例えば前掲の「平成21年の犯罪情勢」<sup>46)</sup>で示されている25件のわいせつ目的略取誘拐被害、53件の強姦被害、873件の強制わいせつ被害がどの場所での様な状況を経て発生したのか、より詳細な情報の提示がなければ、今後の小学生の犯罪被害防止にこれらの統計データを活用していくのは困難である。犯罪被害に関する資料は個人情報が含まれていることもあり、一般の者が直接これらの犯罪記録を閲覧することは難しい。また、犯罪情報を詳しく公表することは、模倣犯の増長に繋がることも懸念される。しかし、例えば本人確認と情報を知る目的を明らかにし識別番号とパスワードを発行して情報へのアクセスを制限した形で犯罪被害の情報を提示することは可能である。今後、警察庁等には小学生の犯罪被害の防止を考えていくために活用できるより詳細な資料提供に関する検討を強く望みたい。

さらに、④の防犯に関する学術的な科学的知見については、近年、いくつかの有意義な研究成果が公表されるようになってきた。例えば、菊池らはある県における3年間の不審者遭遇情報と屋外での性犯罪認知データについて地理情報システム等を活用して解析し、「声かけ」などの不審者遭遇情報発生後の1カ月の間に発生地点から1km以内での性犯罪発生件数が有意に高かったことを報告している<sup>51)</sup>。この結果は「声かけ」への子ども達の対応についての防犯教育を拡充するとともに、「声かけ」などの不審者情報を子どもたちが大人に報告し、その報告を防犯に活用していくことの重要性を示している。また、雨宮らは神戸市内の5小学校区における2,000人以上の

児童の放課後の行動記録と恐喝・暴力・誘い・追いかけ・痴漢などの犯罪被害遭遇事象との関係を分析し、児童が1人で歩行している状況で統計的有意に犯罪被害に遭いやすいことを実証している<sup>52)</sup>。この結果は、本研究における分析対象書籍中の24書籍（72.7%）に記載されていた「外を歩く時にはできるだけ1人にはならないようにする」という事項の妥当性を強く支持するものである。子どもへの防犯教育に関するコンセンサスが醸成されその内容を向上させるためにも、今後より多くの科学的知見が蓄積されていくことを求めたい。

最後に、今回の研究では、小学生の防犯に関する一般市販書籍のレベルでは、小学生の防犯対策について十分なコンセンサスが形成されていないという結果であったが、表4に示した検討対象33書籍のうちで記載書籍数が多かった上位63項目や、図2の犯罪に遭う危険がある場所などについては、その多くが小学生の防犯において重要な事項であると考えられる。さらに、表4の記載書籍数上位63項目と図2、図3、図4に記した事項以外でも小学生の防犯において重要と考えられる事項が複数あったため、その代表的な項目を表6に示した。このうち、「子ども110番の家の人と知り合いになっておく」、「夜は一人歩きしない」、「持ち物の目立つ所に名前を書かない」、「保護者は子どもの下校時間を把握しておく」などは路上歩行時の安全確保に特に必要な事項だと考える。また、「不審者・危険な人/声かけと対応」の項に挙げた「不審者の声かけパターンを知っておく」、「知らない人とはどのような人のことを言うのか子どもにその概念をしっかりと持たせる」、「不審者について固定概念をもたない」および「知っている人の車でも保護者の承諾がない限り乗らない」などの事項は、いわゆる「顔見知り」による犯罪被害や「巧妙な手口による子どもへの接近」による犯罪被害を防ぐうえで極めて重要な事項だと考える。さらに、「防犯のために大切なことは子どもに繰り返し教える」、「テレビなどでの犯罪のニュースについて親子で対応を話し合う」などの親子での防犯に関する普段の会話や、「プライベートゾーンについて教え、他人に見せたり触らせたりしてはいけないことを子どもに認識させる」、「性的犯罪とはどのようなものか子どもに教える」などの性教育にも関連した事項も、子どもの犯罪被害を防ぐうえで重要な意味を持つものと考えられる。

## 5. むすび

本研究では2000年から2009年の10年間に出版され一定の条件を満たした小学生の防犯に関する33の市販書籍に記載された小学生の犯罪被害防止に関わる事項を抽出し、

その内容を比較検討した。この様な複数の小学生の防犯に関する書籍の内容に関する網羅的な検討の報告は過去にはなく、一定の知見を提示することができたと考える。本研究の成果が、今後の小学生への防犯教育の内容の向上と防犯教育におけるコンセンサスの形成、さらにはより「安全なコミュニティ」の構築に寄与できることを願いたい。

## 追記

本研究は、日本科学技術振興機構 社会技術研究開発センターの研究開発プログラム「犯罪からの子どもの安全」の研究開発プロジェクト「犯罪からの子どもの安全を目指したe-learningシステムの開発」(研究代表：大阪教育大学 藤田大輔)の一環として進められた。また本研究の一部については、2009年度の第3回日本セーフティプロモーション学会学術集會にて発表した。

## 引用文献

- Ekman DS and Svanström L. Guidelines for applicants to the International Network of Safe Communities and Guidelines for maintaining membership in the International Network of Safe Communities WHO Collaborating Centre on Community Safety Promotion. Stockholm, 2008.  
at : [http://www.phs.ki.se/csp/who\\_safe\\_communities\\_member\\_en.htm](http://www.phs.ki.se/csp/who_safe_communities_member_en.htm) ; Accessed June, 2009.
- World Health Organization. WHO Collaborating Centres on Safety Promotions and Injury Prevention, Quebec and Community Safety Promotion, Karolinska Institute, Safety and Safety Promotion: Conceptual and Operational aspects. 1998.
- 独立行政法人日本スポーツ振興センター東京支所. 防犯標語「いかのおすし」のルーツを探る! 2008.  
at : <http://www.naash.go.jp/branch/rensai/rensaikanoosushi.html> ; Accessed October 15, 2010.
- 池田 實. 誘いかいや暴力から命を守ろう. 川邊重彦・岩切玲子 監修. 安全な学校生活を考える本(3) ; 東京 : 小峰書店, 2002.
- 佐伯幸子. 親子で覚える徹底安全ガイド. 東京 : 主婦の友社, 2003.
- 横矢真理. 危険回避・被害防止トレーニング・テキスト. 東京 : 栄光, 2003.
- 戸田芳雄(監修). 学校・家のまわりの危険. ぼくたちの危険攻略ファイル(1). 東京 : 教育画劇, 2004.
- 戸田芳雄(監修). まちの中での危険. ぼくたちの危険攻略ファイル(2). 東京 : 教育画劇, 2004.
- 安藤由紀. かりやぞの のり子. Say “No!” “やめて!” という. 東京 : 岩崎書店, 2004.
- 横矢真理. 身近な危険から子どもを守る本. 東京 : 大和書房, 2004.
- 横矢真理. 犯罪の危険から子どもを守る! 東京 : 学習研究社, 2005.
- 阿部浩二, 山崎裕恭, 出雲加那子(編). 親子で学ぼう! 子どもを危険から守る. 東京 : ブティック社, 2005.
- 小宮信夫. 親子で実践! 犯罪・危険・事故回避マニュアル. 東京 : 主婦と生活社, 2005.
- セーフティ教育研究会. 子どもセーフティマニュアル こんなとき, どうする? 東京 : 日本標準, 2005.
- 国崎信江. 犯罪から子どもを守る50の方法. 東京 : ブロンズ新社, 2005.
- 森 健, 子川 智, 岩崎大輔. 子どもの安全ハンドブック. 東京 : 山と溪谷社, 2006.
- 国崎信江. 狙われない子どもにする! 親がすべきこと39 ; 東京 : 扶桑社, 2006.
- 犯罪から子どもを守る! ハンドブック. 東京 : あおば出版, 2006.
- 柿沼信之. 親子でまなぶ子どもの防犯ガイド. 東京 : 角川学芸出版, 2006.
- 青山剛昌. 名探偵コナン防犯テクニック. 東京 : 小学館, 2006.
- 国崎信江. こどものあんぜんどくほん. 東京 : 太陽出版, 2006.
- ALSOK あんしん教室. カルタで覚える ドラえもん あんしん・あんぜん教室. 東京 : 小学館, 2006.
- 清永賢二, 村上信夫, 宮田美恵子. 子どもの安全はこうして守る! 東京 : グラフ社, 2006.
- キッズニュース研究会. ママたちネットワーク. 親子でトライ!! クイズ 子どもの安全なるほどブック. さいたま : 海苑社, 2006.
- 中島正純. 元刑事が教える子どもの安全新常識! 東京 : ベストセラーズ, 2006.
- 国崎信江. わが家のチャイルドセキュリティ. 東京 : 一ツ橋書店, 2006.
- 寺本 潔. 犯罪・事故から子どもを守る学区と学校の防犯アクション41. 名古屋 : 黎明書房, 2006.
- 国崎信江. Kセキュリティ株式会社. 犯罪から身を守る絵事典. 東京 : PHP研究所, 2006.
- 横矢真理(監修). みち 登下校時の事故や犯罪から身を守る. じぶんをまもろう みんなをまもろう(1). 東京 : 学習研究社, 2007.
- 横矢真理(監修). あそび 家庭内の事故や自宅付近の危険を回避する. じぶんをまもろう みんなをまもろう(3) ; 東京 : 学習研究社, 2007.
- 横矢真理(監修). やくそく 外出時の事故や犯罪から身を守る. じぶんをまもろう みんなをまもろう(4). 東京 : 学習研究社, 2007.
- 横矢真理(監修). 安全指導活用ブック. じぶんをまもろう みんなをまもろう(5). 東京 : 学習研究社, 2007.
- 石井栄子. 親子でできたえる防犯力. 東京 : フレーベル館, 2007.
- 近藤 卓. ALSOK あんしん教室. お父さんは, 子どもを守れるか!? 東京 : 日本文教出版, 2007.
- 佐伯幸子. 子どもを守る! ママとパパのファミリー安全ブック. 東京 : メイツ出版, 2007.
- 渡邊正樹. ワークシートで身につける! 子どもの危険予測・回避能力. 東京 : 光文書院, 2007.
- 小宮信夫(監修). 親子で学ぶ「子どもの防犯」ワークブック. 東京 : 東京書籍, 2007.
- 佐伯幸子. 親子で学ぶ防犯の知恵. 東京 : 少年写真新聞社, 2007.
- 清永賢二. 防犯先生の子どもの安全マニュアル. 東京 : 東洋経

- 済新報社, 2008.
- 40) 国崎信江(監修). 犯罪の被害から身を守る. 安全な毎日を送る方法(1). 東京: 学習研究社, 2009.
- 41) 宮田 仁(監修). ネットトラブルから身を守る. 安全な毎日を送る方法(2). 東京: 学習研究社, 2009.
- 42) 藤井厳喜. 劣化列島日本, 廣済堂: 東京, 2003; 104 -122
- 43) 内閣府. 治安に関する世論調査. 2006.  
at : <http://www8.cao.go.jp/survey/h18/h18-chian/index.html>; Accessed December, 2008.
- 44) 警察庁. 平成22年版 警察白書. 東京: ぎょうせい, 2010; 57-63 .
- 45) 警察庁. 平成21年の犯罪. 東京: 警察庁, 2010; 324-327.  
at : [http://www.npa.go.jp/toukei/keiki/hanzai\\_h21/h21hanzaitoukei.htm](http://www.npa.go.jp/toukei/keiki/hanzai_h21/h21hanzaitoukei.htm);
- 46) 警視庁. 平成21年の犯罪情勢. 東京: 警察庁, 2010; 120 - 123.  
at : [www.npa.go.jp/toukei/seianki8/h21hanzaizousei.pdf](http://www.npa.go.jp/toukei/seianki8/h21hanzaizousei.pdf) ;  
Accessed October 20, 2010.
- 47) 東京都教育委員会. 安全教育プログラム. 東京: 東京都教育庁指導部指導企画課, 2009; 29-38.
- 48) Cope CS. Stranger Danger-How to keep your child safe . NY: Carder Books, 1997; 13-28.
- 49) 京都府警察. 子ども安全情報  
at : [http://www.pref.kyoto.jp/fukei/anzen/seiki\\_t/kodomoanzen/](http://www.pref.kyoto.jp/fukei/anzen/seiki_t/kodomoanzen/) ;  
Accessed December, 2010.
- 50) 斎藤勝久, 近藤伸也, 目黒公郎. 子どもの防犯データベース設計に関する研究, 生産研究, 2009; 61(4) : 722-725.
- 51) 菊池城治, 雨宮 譲, 島田貴仁 ほか. 声かけなどの不審者遭遇情報と性犯罪の時空的近接性の分析. 犯罪社会学研究, 2009; 34 : 151-162.
- 52) 雨宮 護, 齊藤知範, 島田貴仁 ほか. 小学校児童の空間行動と犯罪被害に関する実証的研究. 都市計画論文集, 2008; 43(3) : 37-42.